

ウズベク女性の手が生み出す刺繍 カシュタ

今堀恵美 いまほり えみ / AA 研ジュニアフェロー

フィールドワーカーが必ず持ち帰る「もの」、それが現地の工芸品ではないだろうか。目の前にある工芸品はフィールドへの想いをいさない、その土地に研究者を再び連れ戻す力さえ有するかのようだ。

私が研究する中央アジアのウズベキスタンには多種多様な工芸（ハンド・クラフト）が発達している。歴史上有名なシルクロードの隊商都市、サマルカンド、ブハラ、ヒヴァ、コーカンドを抱える同国では、陶芸、木工、金工、染織、細密画などあらゆる方面の工芸が発達している。私は染織分野のうち刺繍に関心を持ち、刺繍制作に携わる人々と深くつき合ってきた。その研究の一端を紹介しよう。

ウズベキスタンの刺繍

ウズベキスタンにおける手作りの刺繍は大きく二つのグループに分けられ、それぞれの用途、装飾品目、意味、歴史や継承方法が異なる。ウズベキスタンで暮らすと頻繁

に参加する結婚式で、絢爛豪華な金糸刺繍がほどこされた民族衣装を身にまとう男女を目にすることがある。この金糸刺繍はザルドゥスとよばれ、かつてブハラの宮廷で君主たち特権階級のみが着用を許された儀礼服の装飾技法として発達した。ここでは師匠を頂点とした徒弟制によって男性職人に技が伝承された。

一方、色糸を用いる刺繍は村落部も含む中央アジアの広い範囲で制作されていた。色糸を用いる刺繍はウズベク語でカシュタと呼ばれ、女性が幼少時から母や女性親族から習い、結婚までに準備する花嫁道具を飾る技として発達した。ゆえにカシュタは女性の仕事であり、男性が制作に携わることも、商品用に制作されることも少なかった。カシュタで装飾され

る品物には、大判の壁掛け（スザニ）、礼拝用敷物、シーツ、目隠しなどの布用品がある。中でもスザニは19世紀、ロシア帝国の南下政策に伴って入植してきたロシア人旅行者や民族学者たちの目を引き、優れた装飾品が多数蒐集され、本国に持ち帰られた。現在、それらのアンティーク・スザニにはヨーロッパを中心に多くの愛好家があり、オークションでは高値で取引されている。もっともアンティークに手の届かない人々は新しい刺繍布を手頃な値段で入手する。

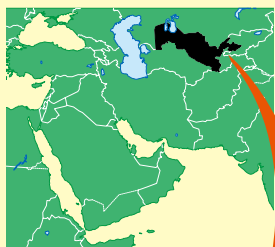
では、今時のカシュタはどのように制作・販売されているのか。仕事としてのカシュタを理解したい、そのような興味に駆られて私はウズベキスタン中部に位置するブハラ市周辺の村落部S地区でフィールドワー



夜遅くまで近所の女性とカシュタを制作する。刺繍の布地には手織綿布「ブズ」が用いられる。だが最近では絹布や、絹と綿を両方使って織り上げた布地「アドラス」も人気が高い。近代以前は革製品にも刺繍が施されていた。



ブハラの観光フェスティバルでスザニ（大判のカシュタ）を販売する女性。



クを行った。

カシュタを制作する女性の手

ウズベキスタンでは挨拶の時にまず握手をする。刺繍を施す若い女性たち、その多くは10代後半の女性たちだったが、握手をするとみな大きくて、私より乾いた手をしていった。これは乾燥地帯のウズベキスタンで、村落部の女性たちが綿花摘みや家庭菜園などの農業や日々の家事をこなすからである。村落部女性たちはムスリム（イスラーム教徒）であっても屋内だけで過ごす訳ではない。綿花収穫期である10月、学齢の女性たちでさえ早朝から夕方まで綿花摘みにかり出される。「綿花摘みは最悪の仕事よ、家で刺繍しているほうがよっぽどいいわ」。

綿花摘みのみならず、感心するほどよく働く村落部女性たちは若い頃から、大きくて乾いた手になる。その手が雑多な仕事の合間をぬって制作するもの、それがカシュタである。

カシュタを仕事にする

S地区のカシュタ制作では、主にサ

テン系とチェーン系のステッチ（刺繍の刺し方）が用いられる。チェーン・ステッチとは鎖状に連続して糸を渡す技法で、世界中で最もポピュラーな刺繍技法である。サテン系ステッチは他の地域でも用いられるが、チェーン・ステッチのみでモチーフの全面を覆う点がブハラ刺繍の特徴の一つである。ただ、このステッチは誰でも取り掛かりやすいが極めがたい。一定の密度で同じ大きさの鎖をつなげていくのは根気と集中力を必要とし、私も挑戦したが作品が仕上がる前に飽きてしまった。このような根気のいる仕事でも、村落部の女性たちは実にこつこつと制作にいそしむ。それは、カシュタが女性たちに収入をもたらすからである。

現在S地区では、村落部女性は花嫁道具を飾るためだけにカシュタを制作している訳ではない。1991年のウズベキスタン独立以降、激増した観光客向けの土産物としてカシュタを制作する。労働年齢に達した全成人が就業できる環境と退職後の年金が保証されていたソ連時代が過ぎ

去った今、人々は自力で仕事を見つけなければならない。特に村落部では国営工場の多くが倒産し、綿花収穫期以外に女性たちが定収入を得るのは難しい。そのような状況において、これまで培ってきたカシュタの技を応用して村落部女性たち自ら新たな収入源を作り出してきた。

もともとカシュタの仕事には固有の難しさがある。作品をデザインして制作し、販路まで確保しなければならないカシュタ事業家にとって、なぜ他の人の商品が売れて、自分の商品が売れないのか、これは永遠の謎である。

「同じように豊富なシルクを使って、最高品質の布地だって使っている。そして布地一面にカシュタを施して時間も手間もかけている。なのに、なぜ売れないの」

それまでは皆と同じように働けば同じ収入が得られるソ連式の社会主義的労働環境で働いてきた。計画経済下では、労働者が生産ノルマを達成すれば給与が保証されていたのである。だが市場経済への移行後、工芸品であるカシュタは顧客——その

多くは欧米を中心とする外国人——の審美眼に合うか否かが売り上げを左右する。ソ連式計画経済で働いてきた人々にとっては、我々には見慣れた市場経済における格差が、強い戸惑いをもたらすようだ。

そうは言っても、確実に売り上げを伸ばし、経済的に成功する事業家も増えてきた。彼女たちの多くは社会主義改革の恩恵で普及した高等教育を受け、芸術学や民族学関連の本で学んだ「伝統」的なモチーフやデザインを商品開発に応用して成功を収めている。ソ連時代の遺産として必ずしも負の側面ばかりではなく、彼女たちが自ら解決策を見出す力も受け継いでいることが分かるだろう。

仕事という視点からカシュタを眺めることは、工芸品という「もの」に携わる人間の生活を描き出すことでもある。それはカシュタという工芸を媒介に、人と「もの」がつながる世界の発見といえよう。発見だけではなく、自らもその世界に触れられる所にフィールドワークの醍醐味がある。



結婚後の花嫁お披露目会で金糸刺繍の上着を着る女性。



観光フェスティバルは外国人が多数訪れる。スザニはウズベキスタンの土産物として人気の高い商品である。



綿花摘みをする女性たち。彼女も普段はカシュタを制作している。